〈新資料〉

曲亭馬琴と『芝蘭選』

井上隆明

馬琴の新しい資料を紹介する。

短文ではあるが、執筆の時間がわかるし、印も捺されている。かれの友人に、秋田藩士茂木（もてぎ）蕉窓があり、その蕉窓が東都や諸国の知己を頼って染筆を乞い、それらを集めた『芝蘭選』の跋を、馬琴が書いている。いじょうが簡単な執筆事情で、いま秋田に写本と原本の一部が残っている。馬琴跋は、そのまま痛みなく保存されてあった。

写しは秋田県大館市立栗盛記念図書館真崎文庫のうち、「舎惜録」第一編（図書番号M一九—一）に入り、慶応二年三月、海鷗閑人こと藩士真崎勇助季顕による写本集である。真筆のほうは、秋田市保戸野原の町三—一九鈴木祐喜氏の所蔵で、断簡零墨雙紙断絹を綴った貼込帳に挿まれてあった。

馬琴と蕉窓のあいだがらについて、かつて手短かに書いたことがある（日本随筆大成第一期五巻付録、吉川弘文館版・昭和50年6月）が、このたび前記鈴木氏宅で直筆を見ることができたため、さらにくわしく紹介してみたい。

天保十二年秋稿『南総里見八犬伝』最終の回外剰筆、つまり第九輯巻五十三下に

吾知音（ちいん）の友の。本伝を見果ずして。早く鬼籍に入りし者。出羽に茂木巽（たつみ）あり。江戸に蒲生秀実あり。伊勢に櫟亭琴魚あり……

と載る巽は、茂木蕉窓の通り名になる。藩士で歌人、諱知利、蕉窓と号した。伝をつまびらかにしないが、文化八年五月、秋田市郊外の農家で、那珂左右宜斎（通博）、広瀬有利といった藩の知識人や、三河生まれの医家で旅行者の菅江真澄らと揮毫会を催している（真澄『軒の山吹』）し、秋田のしるき文人グループの一人とわかる。同十三年冬・陸奥旅行のおり、菅江真澄のはなむけは、

帰り来む日数かそへてまつしまや
余波をしまのけふのわかれち
（風のおち葉・六）

の一首で交友のほどをしのばれよう。

馬琴の『燕石雑志』（文化6）に、秋田の梨、また『玄同放言』（文政初）に、秋田市寺内の烏沼図、北秋田郡鷹巣町沢口字小勝田の埋蔵家屋、それに名物魚のハタハタが載るのは、たぶん蕉窓の提供によるだろう。

馬琴の筆になる茂木蕉窓編『芝蘭選』跋文は、半紙二枚分（一枚が縦二四×横三一・二センチ）で、左のとおりである。

尊耳卑目者、愚俗之迷也。以罕爲無者、腐儒之見也。昔張騫窮河源而漢家肇辨西隣之廣晉郭璞注古經、而民俗不怪山海之奇由、是觀之目之所親必、蓋智足之所踏心闊之、都會之地人物闊達萬里之客必有異聞。是故欲遊觀名山勝地者織路不苟、貪險阻不敢住緩陟尚恐有所觀、其所觀所遊非學者博物之一助耶。

出羽秋田藩臣茂木翁嘗志于玆、然爲紈袴繫乎。腰不得縱其足憮然嗟嘆恨々不已。既而覺體不安致仕、而後得瘳矣。於是乎輿地風土紀行之書無不悉覽之雖、則使其月日遊於名山勝地、猶憾無其足之所行因募之于四方、書畫詩歌璧玉石卉木之花葉、凡新古名品都鄙名物皆隨獲充之、帖數年而數卷六十六國爲無闕遺焉。竟使畫者寫自己肖像貼之、左方云蓋擬果夙志也、譬如不經過白河關、而客裝諷詠還而傲乎。歌人

雖好事以費志苦心可憐焉。今妓茂木翁携來諸東都而求予書、予漫然不敢辭、卽記其事還之。

文化十一年甲戌夏肆月十四日　書于著作堂雨窓

飯臺　瀧澤解　撰印印

関防は白印で「曲亭」、末尾の飯台はいうまでもなく、飯田町中坂下南側の住居である。署名の下は朱を連印にして、さすがに江戸中期の文人らしく印の作法をわきまえている。上は「蓑笠隱居」、下が八犬伝各編序に用いてある四阿図を中に挾んだ易の乾坤、つまり天地否を兆象する卦で、隱忍自重を表していそうだ。

筆を執った文化十一年を、「ビブリア」第三十七、八号の馬琴年譜稿に照らすと、曲亭は四十八歳、春から小恙あって、夏にもっとも留飲に苦しんでいる（无益の記）。その十一月には『南総里見八犬伝』初輯五巻五冊を板行する記念すべき甲戌の歳であった。

序文は藩の一級知識人三人が書いている。はじめに藩家老疋田松塘は、「耽奇好古凡百爾物稱爲奇古者、雖草木羽鱗之微皆千里求之……予友茂木生早乞骸骨……於是乎四方同好郵筒相寄積久益夥、竟夫天下山河之奇、海内花樹之妙燦然」と、收集家であったことを記している。梅津忠周（號博山）は、「好作和歌、又愛品茶、一日携松樹尺許者來、見餘小蓋成蔭蒼翠欝然可愛矣。茂巽曰、是則洛東南宇治山僧喜撰舊趾之物、其郷人大藏某所贈物雖、小對此有如千里勝地徘徊俯仰撫景弔古、餘又請四方騷客韻士諷詠之以爲一卷、欲以爲臥遊之資、請君賜片言爲寵光、余謂茂巽者閑人之最至幸者而、獨縱間中之樂者也。其爲樂者何也、明窓淨机散帙讀書千載之邈焉也」と趣味人のほどを紹介してある。

俳号左右宜斎、漢学や書に秀で、『秋田風俗問状答』（文化11）の編者になった那珂通博（号碧峰）は、文化七年春清明と年月を記し、「大丈夫何必以在几案之間、為以佔畢、嗟呼為学泛大水凌絶峯」のように学識を説く。自序は、文化五年五月の筆になっている。

身のうつはのつたなく、人にいひこはまれむことこそ、難波かた鹽みちきつる蜑ころも、かへす〳〵もうしろめたけれとも、郭公遠く鳴、あやめ咲そふあしたより碪の遠く聞へ、雁鳴てくる霧まの夕、たゝいつとなく雨にぬれ、露にいとゝし。かしこ人のむしろにぬかつき、唐うたにまれ、和歌にまれ、ほ句にいとよく、詩と歌の興したるまて、せちにこひけるに、ふしきのまこゝろかうふりて、人々のふみ手にかきてたひけるを、山の井のかけはなれて、あさか山の淺からぬ心にて、一ひら二ひらとかさねつゝ……方丈の中にうつたかうして、おきて見いねて心をあやつるも、かしこき君か御代にうまれたる身のさちなりけり。されは人々の玉樹のことの葉をは、しらにの薫あひたるになすらひ、芝蘭選とこそわさめきたるのみ。

男知居か等閑につたなきからうたハ、もう〳〵の簧聲にくらへては、花の例に深山木そへしものにて、しらにのかほりそこなはむ。夜の鶴の情も又やるかたなし。ゆるし給ひかし。

源　知利　述

文化五　菖蒲ふくけふ

右の自序によって、諸国の芝蘭玉樹に筆を乞うた経過が知れるだろう。

馬琴跋文は、原文で写真のように年号のところが擦切れている。この部分と、芝蘭選に収められた作品は、大館市立栗盛記念図書館蔵写本によって補わなければならない。それによって跋文は、「文化十一年甲戌夏肆月十四日書于著作堂雨窓」とわかる。大館図書館の写本には海鷗閑人（真崎勇助）の識語があり、「此芝蘭選は巽翁茂木氏の編輯なりしを、其家の某直吉よりかり得て写とりぬ。時に慶応弐のとし、やよひのけふ。海鷗閑人〔印〕」と慶応二年の筆写を明らかにする。

掲載作は左の人びとのものであるが、秋田領内の分は省いた（住所などは原文ママ）

〔和歌〕村田春海門下の平竹庵務廉、柳営騎士成嶋勝雄、同騎士正臣、同遊清、屋代弘賢、一橋御書院番山口李蹊、津村茂春（三郎兵衛）、小石山の間智政（勘助）、高安、砂長、京の牛尾介之（東一）、嶋原香果楼みつ里太夫、加茂季鷹、淮南堂正明（桂眉住。芝山中納言持豊門人、下谷七軒町）、大坂の上嶋間雄、浄光寺斎収、井辻尚監（仁兵衛）、湯村知常（愿庵）、加嶋屋百壺（定八）、専有、田中雁音（元仙）、日向の安藤真彦、紀州の安田貴氏（長兵衛）、山本北山妻やそ、同娘たみ、白井真澄。

〔漢詩〕亀田鵬斎、大田綿城、大窪詩仏、村瀬栲亭、龍元道、山本緑陰、長田清音和、篠崎小竹、広瀬履道。

〔発句〕湖十、李岱、俳談林瓠山、平沢太奇、七世団十郎、お玉ヶ池の得然、牛込歩行町の朱明、朝四、素兄、芦中、芦角、京の堀本雅口、井上五原（高倉錦小路西へ入町）、大坂の三津人、井眉、奇淵、屋烏、盛岡の素郷、牛角、酒田の長翠。

〔狂歌〕蜀山人、手柄岡持、山東京伝、感和亭鬼武、四方真顔、六樹園、桂眉住、浅草庵市人、蝙蝠軒魚丸、神田明神前の持吾、柳営騎士安寛、同魚雅、白河の白鶴房雪木宿成。

右のうち、参河白井氏真澄は、菅江真澄（未来社版全集刊行中）で、掲載作「なかめ捨て皈らんもをしなか〳〵に霧立こめよまつしま乃浦」は、『著作堂雑記』に転載されている。馬琴は『芝蘭選』に眼をとおしていたにちがいない。

「国文学研究」投稿規定

一、投稿論文は原則として、四〇〇字詰原稿用紙三〇枚以内とし、べつに四〇〇字程度の要旨を添えること。
一、投稿論文には、住所・卒業年度・職業を明記すること。
一、投稿締切り日は、二月一五日・六月一五日・一〇月一五日とするが、随時投稿されたい。
一、採否に関しては編集部に一任されたい。
一、校正は初校のみを執筆者にまわし、以後は編集部が行なう。